

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

クズ マメ科

- ・学名 *Pueraria lobata*
- ・公園内外の林縁に自生



つる性の植物で、植物体全体に粗い黄褐色の毛があります。葉は 3 個の小葉からなる複葉で、小葉には小さな托葉があります。「小葉は長さ 10-15cm で浅く 2~3 裂する」と図鑑に書かれていますが変異が多く、同じ植物か迷うこともありま

す。写真左は切れ込みの大きいタイプ、右は切れ込みの少ないタイプです。



この季節に目につくのは茶色がかった紅紫色の花です。花序は総状に花を付け、根元から先端に咲き上がります。咲き終わりから蕾まで一つの花序で観察できます。花は紅紫色で 2cm とやや大きく、マメ科植物の花の形態を観察するには都合の良い植物です。



クズは地表面に覆い被さるように葉を広げ、枝に巻き付きながら樹木にも絡みついでいきます。樹木に巻き付いたクズは植物を覆い隠して被陰しますし、手入れの際に邪魔になるやっかいな存在でもあります。地表面から樹木を覆い尽くすクズは、景観上も問題にされます。しかし、クズのようなつる植物は、倒木や森林伐採に伴い林内に光が射し込み風が通ることで急激に変化する森林内部の環境を、すみやかに側面を覆って光の射し込みを押さえ、風を遮断することで、環境変化を抑え、元と同じような環境を復元する役割を果たしています。マント群落と呼ばれますが、まさにマントの役割を果たして森林の内部環境の安定化に貢献しています。

また、地表面をすみやかに覆う性質は、土砂が移動して緑化が進まない乾燥地や崩壊跡地で、表面を覆い尽くすことで土砂移動を押さえ、土の動きを止めることで植物の定着を促す役割も持ちます。この覆い尽くすという特徴を活かして、中国や

アメリカではクズを用いて乾燥地の緑化を行っています。緑化自体は多くの場合成功するのですが、旺盛な繁殖力で猛烈に増え続けるため、現地では外来種として問題視される程にまでなっていました。人間の管理の都合で、今度は駆除の対象です。



悪者扱いされるクズですが、昔から私たちの身近にあり、うまく利用してきた植物でもあります。クズは秋の七草の一つで「葛花」として知られます。根からとった澱粉が葛粉として知られますが、植

物名の由来は奈良県吉野の国栖(くず)が葛粉の産地だったからという説があります。奈良県宇陀市大宇陀の森野吉野葛本舗が、昔ながらの葛粉の生産を行っており、吉野地方が葛粉の発祥と言われるのも頷けます。葛粉は薬としても用いられ、葛根湯がよく知られます。葛粉生産の森野吉野葛本舗は江戸時代に薬園を開設し、薬草園を維持し続けて、薬の町としての発展に寄与してきました。

クズは様々な見方が可能な変化自在な植物であり、いろいろと話題に事欠きません。文化公園の中は適切に草刈りして管理しているのですが、それでもところどころにクズがはびこっています。公園外の街路を見れば、クズが一面を覆っている姿が目に入るので、公園管理者の苦労を思わずにはいられません。

(龍谷大学先端理工学部環境生態工学課程
横田岳人)